

# GAPセミナー2008 in 鹿児島

11月15日、鹿児島大学工学部稲盛会館ホールにて、南興商事(株)主催、(株)さつま元気坊と当社の共催によるGAPセミナーが開催された。GAPに関心の高い生産者、青果卸業者、青果バイヤー、農業資材販売業者、食品加工業者、焼酎メーカー、茶販売業者、地方銀行、教育関係者、マスメディア等200名を超える参加があり、「JGAPは農業再生の有効な武器」「JGAPについて」「新たな農産物流通の現状」等の講演があった。

参加者から回答を得たアンケート結果によると、GAPを知っていた - 19%、聞いたことがあるが詳細は知らない - 37%、また全く知らないが44%であった。日本GAP協会に登録しているJGAPの指導員も鹿児島県は8名しかいない。農業生産者にJGAPの導入指導が思うようにできていない、認知・普及が進んでいないのが現状で、鹿児島県内のGAPの普及はこれからである。

セミナーの内容については、参加した9割以上の人理解できた、またはよく理解できたと好評であった。また、次回このようなセミナーがあればぜひ参加したいという希望者が多く、さらに驚くべきことに、生産者の殆ど全てがJGAPの導入を希望していることがわかった。参加者がもっと詳しく聞きたかったところは何かとの問いには、導入農家の規模 有機農業との関連 取得にあたっての制約があるか 導入までの流れ 導入方法 GAP認証農場のメリット 認証取得をどの様にアピールしているか 農産物の輸出についてなどであった。

今回のセミナー企画の背景には、実は、米卸加工会社「三笠フーズ」(大阪市)による事故米の転売事件がある。鹿児島県日置市の焼酎メーカー「西酒造」が醸造する芋焼酎「薩摩宝山」の原料に事故米が使われていたことが分かった。事件発覚3日前、西酒造の製造担当者と焼酎原料の芋の安全を担保するため、芋の生産者にJGAPを導入しようと話し合いを進めていた矢先の事件であった。西酒造の宝山ブランドは、日経ランキングで“ロックで飲んで美味しい焼酎”第一位に「富乃宝山」が選ばれた有名な焼酎ブランドである。美味しいだけでなく安全な原料を使用していることを、アピールしようと考えていた。同社は9/8に6/13～8/22に瓶詰めした約30万本の自主回収を始めた。損失額は少なくとも数億円にのぼるといふ。同社は「今後は、卸売業者を厳格に選ぶなどの対策を取りたい」と話している。

## 焼酎メーカーのJGAPへの取り組み始まる

早速、今回参加した焼酎メーカーからJGAPの導入にあたって支援の依頼があった。原料であるサツマイモの生産者にJGAPを導入したいが、その前に、社員、納入業者にセミナーの開催を希望している。日本でも今後、大手の酒造メーカー、食品加工業者、青果卸業者は、欧州並みに生産者にJGAPの認証取得を取引条件にするところが増える予想される。農産物は食品の原料であり安全が当たり前であるが、今後食品加工業者は、安全を担保するため原料の前工程のチェック、納入業者の選別を益々厳しくすることが予想される。青果卸業者、青果バイヤーもGAPやHACCP等の専門的な知識が問われる。食の安全を担保するには、農業者を始め、フードチェーンに関わる全ての人々にGAPの普及を積極的に推し進めることが必要と考える。



## 中島隆太郎氏台湾政府より特別感謝状が授与される

～ 日本・台湾農産物の交流事業に貢献

西部菱肥会理事長である榊中島の中島隆太郎会長が、多年に亘る日・台農産物の交流事業に貢献したとして台湾行政院農業委員会（日本の農林水産省）より特別感謝状が授与されたことを祝い、11/11 草津市エストピアホテルで受賞を祝う会が盛大に開催された。当日は台湾からの来賓を含め総勢 170 名が参加されたが、当社上杉社長も来賓として祝辞を述べ、同社及び中島隆太郎氏との多年に亘る取引を通じた交流の紹介と、肥料取扱いに加え農産物取引を決断した際のエピソードなどを交え中島隆太郎氏の功績を称えた。尚、同社グループでは台湾に民間品種米の一つである「夢美人」の種子の輸出を始めているが、新たに台湾より長ナス及び熱帯果実（マンゴー、レイシー、ナツメ）の独占生産・販売権を獲得し、来年度より日本でこれらの生産に本格的に取組む予定である。（大阪支店 / 加田）



写真一番右：中島隆太郎会長

## 食と農の架け橋のキーワードは「技術と連携」

～ - 2011に向けて 第12回菱肥会総会 当社上杉社長挨拶全文 (その2)

私どもの周辺の事業環境は変化を続けております。消費者の食の安全に関する関心の高まりと、小麦、大豆などの海外市場の高騰は、食品加工業界における原料国内調達、内食の増加、米粉パンの需要増など国産農産物への回帰を招いております。市場外流通が増えてきているなか、イオングループ、セブン&アイグループなど大手量販店は、流通コストの削減と食品の安全確保を目的に食品のPB化に踏み切ろうとしております。肥料価格の高騰は農業の資源化に加え、農産物本来が持つ栄養素を生かした健康食品の誕生など、農産物の付加価値化を事業の目標とする動きを起しております。今年7/21に農商工連携の法律が施行されましたが、経済産業省が主導的な役割を担っております。地方の活性化と農業の活性化を結びつける狙いがあり、基本スキームは農業生産者と中小企業が共同で事業を立ち上げる創業に財政面、税制面で支援する上に、事業計画作り並びに販売先の紹介などの支援もしていこうと言う内容になっております。2次産業である工業と3次産業である商業が1次産業である農業と新たな事業を創るという農業6次産業化は時代の流れとなると思います。地域によっては、農協との連携も一案かと思っております。イノベーションは技術革新を意味しますが、最近では事業の変革、意識改革といった面でも使われております。農業を様々な切り口で見つめなおし、異業種も交え知恵を絞り、新たな産業を創ることを農業イノベーションとして定義しても良いかと思っております。肥料商の活動分野は間違いなく広がってきております。

今までご説明させていただいた事業環境の変化を如何にビジネスとして取り組むかという観点から、V-2011では、スローガンを「食と農の架け橋 ver. 2」とし、行動目標を“アグリサービスの充実”と“それを実現するための研修の充実”と致しました。アグリサービスの充実では、現場のニーズにあったサービスの提供、JGAPの普及・促進、農商工連携への取組み、三菱商事ネットワークとの連携の4つを掲げました。エムシー・ファティコム様をはじめ賛助メーカー様の工場は全国に広がっております。現場のニーズにあったサービスの提供をサポートしていただける力強いメーカーの方々です。賛助メーカーの皆様方、宜しくお願いします。

夏のクールビズは浸透してきましたが、冬のウォームビズはいかがでしょうか。室温を20度にしましょうという取り組みです。湿度を15%上げれば室温を1度下げても体感温度は変わらないと言われております。乾燥しがちな冬には植物や加湿器を置くなどして保湿すれば、風邪予防と一石二鳥ですね。

編集局長：小田原次洋 アシスタント：助川尚子

電話：03-5802-2011/E-mail：journal@mcagri.co.jp URL http://www.mcagri.jp